

父への思い、そして父としての思い

福德 雅章



私は昭和36年に生まれ、間もなく父が勤務する道南病院の社宅（谷地頭町）で暮らしました。4歳からは元町白百合幼稚園に通い、年少組から年長組になるにつれてめきめきと悪（ワル）の頭角を表わし、本当によく怒られていました。卒園の日、式が終わってから母はわざわざ呼び出され「このままだと小学校ではやっていけない」と釘を刺される始末で、先生方にとって私の先行きはかなり不透明、悲観的だったようです。

この頃、幼稚園から帰る私の行き先はいつも父が働く道南病院でした。診察室にいる父は私を隣の丸椅子に座らせ、私はアイスクリームを食べながらひとときを過ごしていました。同伴診療と言うのでしようか、私は丸椅子をぐるぐる回しながら父の診察ぶりを眺め、いつも看護師さんや患者さんに優しい声をかけられていました。古き良き時代です。

当時、父は学位を取得するため月に一回、札幌（北海道大学）へ出張していました。夜遅くに帰ってくる父を、私

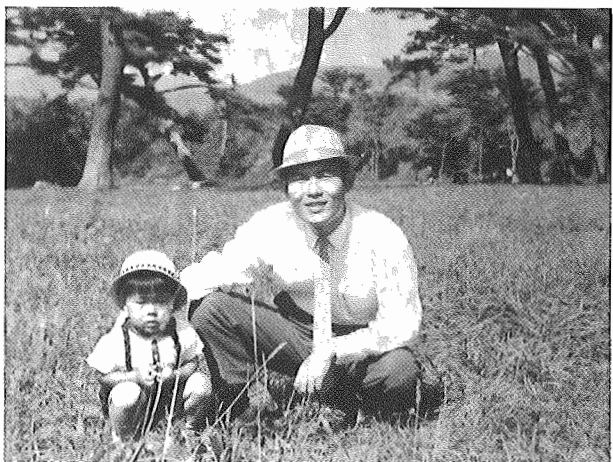
は母と一緒に駅へ迎えに行きましたが、父が必ず持つてきてくれるお土産が楽しみで仕方ありませんでした。

父には子供の時に怒られた記憶がほとんどありません。父は私にとっては優しく、力持ちで、手先が器用で何でもこなせるスーパーマン的存在でした。地震がきても雷が鳴っても、父が居るととても安心でした。幼稚園の学芸会の思い出ですが、段ボールで作った車を用意することになったようです。父が作ってくれたそれは誰のよりも素敵に見え、私は当日、自慢気にそれを乗り回しました。

40歳のとき父は千代ヶ台町で診療所を開業したため、家族は引越しをしました。私は6歳でした。この当ても私は暇があれば診療所へ繰り出し、入院患者さんによく遊んでもらっていました。手術室にも入り、盲腸や骨折などの手術を見る機会がありました。手術そのものよりは、父の姿があまりにも眩しく見え、必然的に自分も医師になりたい、そして絶対に外科医になろうと思っていました。

あれから随分時が流れました。函館を離れた私はいつ

の日か、実家では「びっくりマーク」と言われるほど皆をよく驚かせました。医学部を卒業した時は、直前まで北海道に帰り外科医になると言っていたのに、急に大病院に残って内科医になることを決めてしまいました。



結婚した時には、披露宴を洋風大衆酒場でやりたいと言い出して、揉めました。大病院院を辞めて福岡の病院へ勤務する時も突然の発表でした。

福岡に住んで3年目、平成12年11月のある日、私は「函館ホスピス計画」と題して、ホスピスへの思い、函館へ帰ること、そして函館にホスピスを建設する夢を4×5枚のレポート用紙に書き綴り、突然実家にFAXで流しました。いつもながらの唐突な発表に、父も母も驚き、慌てて電話

をかけてきましたが、子供の時から言い出したら聞かない私のことは皆よく理解しており、とりあえず函館に帰るという点だけでは歓迎ムードでした。

翌年、函館に戻った私は、奇しくも父と同じ40歳で院長となり、その後は多くの人の支えにより、自分でも驚くほど早くに夢が実現しました。そして10年が経った今でも、父は週に一回、私の病院に診療に来てくれています。

かつて福岡にまで行った私は函館に帰る気持ちなど全く無く、父と一緒に仕事することも想像したことがありませんでした。しかし人生というのは分からないものです。子供の時に大好きで、憧れていた父とこうして医師として一緒に仕事をしていることは、今でも不思議な気分です。

時折、患者さんやそのご家族の中に昔、道南病院時代の父に診てもらった、一緒に働いたという人と出会います。社交辞令かもしれないですが、「いい先生だった」「優しい先生だった」「格好いい先生だった」と言われると、私が子供の時に感じていた父の姿そのものであり、とても嬉しく、改めて父のことを誇らしく思ったりもします。

そんな私も、もう51歳となりました。ただただ忙しく過ごしている私の後ろ姿を2人の娘たちはどう見ているのだろうか、と時折しみじみ考えたりしています。

（函館おしま病院 院長）